

研究段階におけるゲノム編集技術の利用により得られた生物の使用等に関する確認結果

令和3年4月5日
文部科学省研究振興局
生命倫理・安全対策室

1. 概要

文部科学省研究振興局生命倫理・安全対策室は、国立研究開発法人理化学研究所より提出のあった「研究段階におけるゲノム編集技術の利用により得られた生物の使用等に係る留意事項について（通知）」（令和元年6月13日付け元受文科振第100号文部科学省研究振興局長通知）に基づく実験計画報告書の案について、令和3年3月22日に学識経験者から意見を聞き¹、遺伝子組換え生物等の使用等の規制による生物の多様性の確保に関する法律における遺伝子組換え生物等に該当しないこと、実験計画報告書の案のとおり使用等した場合に生物多様性影響が生ずる可能性等について適切な記載となっていることを確認した。

2. 確認の内容

（1）ゲノム編集技術により得られた生物の名称

ステロイドグリコアルカロイド低生産性ジャガイモ（系統名 *Solanum tuberosum* disrupted-SSR2 pSuehiro108#117, *Solanum tuberosum* disrupted-SSR2 pSuehiro108#164）

（2）使用等の内容

ゲノム編集技術により得られたステロイドグリコアルカロイド低生産性ジャガイモの野外栽培での検証（限定されたほ場による栽培等）

（3）遺伝子組換え生物等に該当しないことについて

＜実験計画報告書の案の内容＞

- ゲノム編集技術により得られた生物について、PCR法、サザンブロットティング法により、外来遺伝子が残存していないことを確認した。

学識経験者に確認し、当該生物が遺伝子組換え生物等に該当しないことを確認した。

（4）形質の変化の確認

＜実験計画報告書の案の内容＞

¹ 学識経験者から実験計画報告書の案について意見を聴取した（令和3年3月22日）。なお、学識経験者から率直な意見を聴取することや会議内容を公開すると法人の研究事業等の適正な遂行に支障を及ぼす恐れがあることなどから非公開の会議とした。

- ゲノム編集技術により得られた生物は、これまでの観察結果から、植物体（栄養器官及び一部の個体で開花した花）の形態、塊茎収量について特筆すべき差異はない。
- 使用した人工ヌクレアーゼは片側 17 塩基で合わせて 34 塩基を認識し切断する TALEN である。ジャガイモデータベースに登録されている genome assembly (v6.1) を調査し 34 塩基中 27 塩基が一致する配列が最も似ている配列であった。当該配列について変異が生じていないことを確認した。

学識経験者に確認し、上記内容が適切であることを確認した。

（５）生物多様性影響が生ずる可能性

＜実験計画報告書の案の内容＞

５－１ 競合における優位性

- ジャガイモは侵入性・雑草性が高い作物ではなく、畑地外へ進出して繁茂することは想定されない。これまでの観察結果からゲノム編集技術により得られた生物は、植物体（栄養器官及び一部の個体で開花した花）の形態、塊茎収量に特筆すべき形態学的差異は観察されず、自然条件で競合性が高まるとは考えられない。

５－２ 有害物質の産生性

- SSR2 はステロイドグリコアルカロイド（SGA）の生成に関わる鍵遺伝子であり、その生合成経路がゲノム編集で遺伝子破壊された場合には、別のステロール類やステロール合成の中間産物の増加が報告されているが、新たな有害物質が産生されることは知られていない。また、毒性を示す可能性が示唆されているプロティナーゼ阻害因子及びレクチンの生合成系についても SGA 生合成経路との関わりを示す知見は見受けられず、本ゲノム編集ジャガイモにおいてこれら有害物質の産生性が高まるとは想定されない。

５－３ 交雑性

- 日本国内では、同属の野生植物としてイヌホウズキが自生するが、ジャガイモとの雑種は得られなかったことが報告されており、その他に交雑可能な近縁野生植物は国内に存在しない。

なお、実験計画報告書の案の提出者は、本ゲノム編集ジャガイモを限定されたほ場において栽培等としている。

これらのことから、実験計画報告書の案のとおり使用等した場合に生物多様性影響が生ずる可能性について、競合における優位性、有害物質の産生性、交雑性に関する記載が適切であることを学識経験者に確認した。